〔茶傳集九〕一柄杓のはねは、風爐ひしやくは六寸、爐ひしやくは八寸也、柄は一尺一寸貳分半三分にも、昔は引通し也、

合口差渡二寸程、又一寸七八分、是も夏冬茶碗ノ大小に見計持出ル故、定寸なし、

〔茶道望月集十四〕一柄杓の名所は、柄裏の指込たるキワを三ツ角とも殼首（ケラクビ）とも云、節子細なし、節裏を雉子モヽと云、柄の先キを留と云、柄のいりは、風爐柄杓は六寸六七分より七寸二三分まで、爐ひさくは七寸八九分より八寸二三分迄も有、恰好よしと可知、此寸はづれたるは用がたき物也、正言など細工、此吟味能キ也、扨留の所を風爐のさくは分半表のかたへソギて有、イロリは裏の方へソギたる物也、柄の長さは一尺貳寸にして、六寸メに節有と可知也、

〔槐記〕享保十四年三月四日、柄杓ヲ青竹ニテ致シタルハ、定テ清ヲ専ニシタル意カ、引切モ青ク、柄杓モ青ク、イカヾニヤト申シ上グ、仰ニ（○近衛家熙）青竹ニスルコトハシラヌコトナリ、總ジテ茶筌ナド青竹ヲ用ルコトイカヾナリ、生ノ竹ハ必油氣アリテ、湯ヲ汲タルトキ必香氣アルモノナリトテ、昔ヨリモ宗匠達ノ仕ラレヌコトナレバ、其分アルベキカ、新ヲ用ルハ、青竹ナラズトモ清カルベシト申シ上グ、

〔茶譜十七〕一宗言云、昔ノ杓指ノ上手ニ庄ト云者有、其後利休時分ハ市阿彌ト云者上手也、市阿彌ハ京六條邊醒井ト云所ニ住ト也、

一宗言ニ問、言云、近代杓指、大津茶柄杓屋ト書コト、其以前江州大津ニ居テ柄杓造出、其末孫京ヘ來住、其末流ユヘト云、

〔茶話眞向翁坤〕柄杓にも名作有、惠比須堂（東山殿時代○足利義政）養仙坊（紹鷗時代）厄川、仙三郎（利休時代）一阿彌（佐女牛水守豐太閤、天下一に命じ給ふ）、是等名人なれど、柄杓は茶杓に反して新しきを賞翫すれば、其作の物、其名とともに埋れしは、いと遺恨ならずや、